

日本におけるキリスト教の歩み

その4 太平洋戦争から公会議&教皇来日・4

昭和時代
1926

第二ヴァチカン公会議

1962

1965

教皇
初来日

1981

1937年日中戦争勃発後、政府は宗教団体へ厳格な取締を始める。カトリック教会は外国人司教すべて日本人司教に変え教皇庁も認可した。その際、18人の司教たちを任命し、司教団代表に田口司教とし「日本天主公教団」規則を作成した。行政の認可を得た後、日本最初の統治者には東京の土井辰雄大司教が就任した。またプロテスタント教会も同様に「日本キリスト教団」を結成し政府の認可を取得した。

1914年7月-1918年11月
第一次世界大戦

1941年12月-1945年9月
太平洋戦争勃発

真珠湾への奇襲攻撃に始まるアメリカとの戦争が始まった。1945年無条件降伏の日まで3年8ヶ月の間、日本国民と外国人宣教師、そして中立国の人々まで大きな悲劇に巻き込まれた。また神学生、司祭、司教まで軍隊に召集され、戦地に赴いた。この間、教会でのすべての活動は停止、ただ祈るだけの信仰生活と化した。この状況下に及んでキリスト者を迫害する地域もあった。奄美大島や小さな島々では、宣教師を始め信者たちも大きな犠牲を払った。米軍の攻撃は、日本本土にまで及び、教会建物、教育施設、病院などすべて破壊した。またそれ以上に大勢の司祭、修道者、信者の命が、奪われたのであった。特に、広島、長崎に投下された原子爆弾は、一瞬にして70%以上の信者の命を奪った。1945年8月9日の朝、長崎に投下された原爆は、浦上教会の近くであった為、美しい浦上の丘の教会が、一瞬にして瓦礫の山と化した。

第二次世界大戦の敗戦からサンフランシスコ講和条約締結迄
1945年～1952年間日本は、連合国軍最高司令官総司令部 GHQ の占領下

同年8月15日戦争終結。数えきれない人々の負った犠牲、心に深く突き刺さったままの傷の癒しと廃墟と化した教会建物の再建。この惨状は教会だけでなく日本国民全体にも絶望と不安の中を歩まされる苦難の始まりとなった。一方、教会にとって戦中まで悩まされた法律、慣習などが次々に取り払われた。結果、宗教団体に対する法の廃止、国家神道廃止、また新憲法により「完全な信教の自由」が制定された。その後、全世界から多大な精神的、物質的な援助を受けながら再建に励んだ。特にカトリック教会、プロテスタント教会とも非常に恵まれた存在であった。戦後次々に男子、女子修道会、宣教会が来日し日本の教会再建の大きな力となった。1949年、日本に初めてキリスト教を伝えた聖フランシスコ・ザビエルの右腕が、渡来四百年を記念してローマから巡礼団と共に再渡来した。日本各地で大勢の信者と共にミサを捧げられたこの日々は、信仰者への奇跡の記念式典となった。

教会の再構築(建物/信徒)は、順調に進展した。その証として信者の数は、1946年時点で108,330人だったのが、1962年296,620人となった。その数は、信者だけでなく司祭、修道者の召命も増加した。1962年日本の教会は、2つの大司教区と13の教区合計15の司教区になった(1969年大阪大教区、1973年那覇司教区追加)。同年長崎の西坂の丘で26聖人殉教者列聖百年の祝いと記念碑除幕式。同年10月ローマでは第二ヴァチカン公会議が開始され1965年12月12日閉幕した。公会議後、ミサは各国語で捧げることが可能になり、早急にミサ典礼書の翻訳に取り組んだ。また信徒使徒職に関する教令が制定され、信徒の責任ある働きを推奨した。1981年2月23日、遂に教皇ヨハネ・パウロ二世は日本の地を踏んだ。